

そもそも地獄と仏とは
いづれの所に候ぞとたづね候へば
あるいは地の下と申す経もあり
あるいは西方等と申す経も候

しかれども 委細にたづね候へば
我らが五尺の身の内に候とみへて候

さもやおぼへ候ことは
我らが心の内に父をあなづり
母をおろかにする人は
地獄その人の心の内に候 譬へば
蓮のたねの中に華と菓とのみゆるがごとし
仏と申すことも 我らが心の内におはします
譬へば 石の中に火あり
珠の中に財のあるがごとし

我ら凡夫は
まつげのちかきと虚空のとほきとは
見候ことなし

我らが心の内に仏はおはしましけるを
知り候はざりけるぞ

ただし 疑ひあることは
「我らは父母の精血変じて人となりて候へば
三毒の根本 淫欲の源なり
いかでか仏はわたらせ給ふべき」
と疑い候へども またうちかへしうちかへし案じ候へば
「そのいはれもや」とおぼへ候

蓮はきよきもの、泥よりいでたり
せんだんはこうばしき物 大地よりおいたり
さくらはおもしろき物 木の中よりききいづ
ようきは見めよきもの 下女のはらよりむまれたり
月は山よりいでて山をてらす

わざはいは口より出でて身をやぶる
さいはいは心よりいでて我をかざる